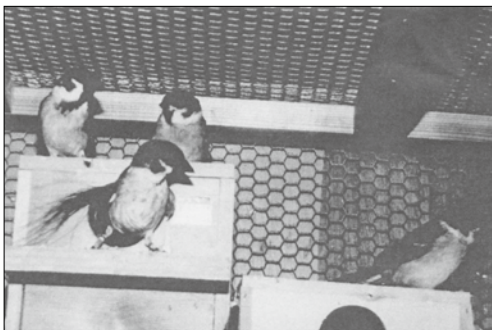


事例 2 鳥の飼育と研究30余年

富山県退職校長会 大田 保文

私は子どものころから鳥と関わり続け、これが退職後に実りつつある。小学4年生の時、作文に「将来の夢は上野動物園の飼育係」と書き、大学2年生の時には同動物園へ手紙を出した。「欠員が出るまで採用の予定はない」との返信を受けたので、当面の課題を「卒論作成と卒業後に絶滅危惧種の雉（キジ）を繁殖し、原産地で放鳥する」と決めた。卒論は「光照射と鶉（ウズラ）の若鳥の成熟」とし、他大学大学院で指導を受けたりして問題解決の過程を体験した。これにより卒業後、・動物の放し飼い・ツバメの夜間行動・イワツバメの営巣能力・土佐オナガドリの飼育法改善等ができた。また、日本雉水鳥協会を通して自宅で繁殖した山鶏（サンケイ）を原産地の台湾で放鳥するという活動により同協会から表彰を受けた。その折、古賀上野動物園長と懇談できたこともあって、自宅繁殖した虹雉（ニジキジ）を同動物園に寄贈した。

教員になって2年目の10月、1羽の雀が稲架（はさ）の竹の穴をまず上から覗いてからその穴に体を押し入れようとしたのを観察した。

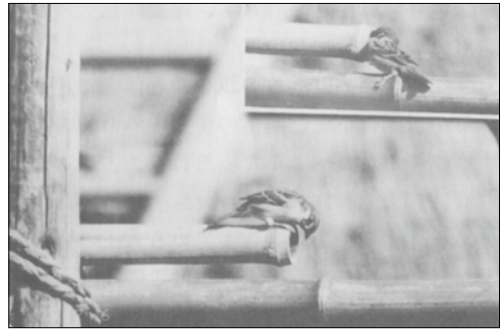


ゲージでの飼育

10年後これを雀（以下、スズメ）の造巣場の探索行動と規定し、採取した巣を観察してスズメには、「桁はずれの造巣能力」があることがわかった。これまでスズメの人工繁殖は不可能とされてきたが、条件を整えれば籠（ケージ）

の中でも可能であると思った。このことから、まず、2つの番（つがい）用の籠で飼育したところ、2番とも繁殖できたのである。

日本鳥学会での発表を機に鳥の研究者と出会えて、学会発表6回の契機となった。



竹の穴を調べるスズメ

また、この成果が、・スズメの球形造巣能力、・スズメミルク、・桜花を食べるのは生得的などの発見へと発展した。

退職後、富山教育会会誌への「鳥に関する文」の連載依頼を受けてから、現職中の調査・研究のまとめを加速させた。研究では、京都大学大学院の山岸教授から提供された資料を基にスズメの巣の進化の視点で、スズメは人里で造巣を省力化しているとの仮説を立て、飼育実験で解明できた。次に、スズメが人里だけに棲む背景を、国の資料（大正12年）を分析し、スズメが餌にする植物の種は人間が耕起した土地に生育している植物だとの説を学会で発表した。この研究結果について、樋口東大名誉教授から「スズメの存在のあり方がまた1つ明らかになった」と評価された。

昨今、「スズメをあまり見かけなくなった」と話したが、以前ケージ内繁殖していた時の環境条件データと高度成長期の前と後に分けて比較することができた。様々な環境汚染によるものだ。今後も、スズメのほか、ツバメ、トキ、カラスなどに関する講演、これまでの研究資料の整理、「動物の放し飼い」写真集を出版してみたい。現在、スズメの人間への接近行動、逃避行動の研究を執筆中である。

事例 3 「地域を活かせる学校支援ボランティア」

福岡県退職中学校長会 關 敏文

子供の健やかな育成には、学校・保護者・地域の連携・協力が何よりも必要であり、この働きかけは学校が中心となるべきだと考える。

いまや、連携・協力の1つの形として学校支援ボランティア活動が拡大・充実してきている。

その中で特に授業などの教育活動の支援をはじめ、地域の歴史や伝統等に関する講話会へ退職校長・教員や地域の人が講師として参加することには、大きな意義がある。

子供たちの学力向上は永遠の命題であるが、実態は高学年になるに従って、学力格差が大きくなることや学習意欲が低減している。この背景には、家庭学習の不足、基本的な生活習慣の未定着など学習環境が整えにくい状況にあると指摘されている。いわゆる学力形成の「負のサイクル」に陥りがちな子供の姿が眼前にある。

私は退職校長会等で、子供の学力向上の重要性を説き、「退職校長・教員の知恵や経験を学校支援ボランティアで活かそう！」と訴えた。

また、市の校長会では、学力向上のために算数・数学、国語などの教科個別指導、教育諸活動の指導にあたり学校支援ボランティアの必要性を説いてきた。

ボランティア活動以外に、退職校長が学校評価委員や地域運営学校（コミュニティスクール）委員として参画し、学校の現状や課題、経営方針等を保護者や地域に伝えるとともに、保護者や地域の要望などの取りまとめやギャップの調整をするなど、学校と一体となってコーディネートすることに寄与している。成果を目の当たりにすると胸が熱くなってくる。

退職校長がコーディネーターとして、学校とボランティアの仲立ちをして学力向上支援活動。学級担任とボランティア、ボランティア同士の打ち合わせの調整。何と云っても、教職経験者は教材の構造や指導の順序性、子供が学習でつ

まづき易いところ、指導上の配慮点等が十分認識されており、これまで培ってきた知恵や経験を活かし、地域ボランティアや学生ボランティアに対して指導の仕方や配慮事項などをアドバイスしながら進めていった。子供たちの学習面での指導展開では、子供一人ひとりのニーズに応じたきめ細かな指導がなされ、即戦力として大変好評であった。

退職校長・教員を中核とした指導体制は重要な存在となったのである。地域ボランティアは地域の歴史等の内容には詳しいが、子供たちへの話し方や資料の提示、問いかけの仕方には不慣れなので、教員OBとして参考意見を述べさせた。こうした協議や活動を通して退職校長・教員も地域の歴史や伝統等を知るよい機会となり、理解・関心が深まったように思う。



地域ボランティアが学校の歴史を説明

学校支援ボランティアはじめ、様々なボランティア活動に退職校長をはじめとする教員OB、地域の人たちの参加が多くなるとともに、やり甲斐を実感して活動しているのがよくわかる。

このように地域を活かせるボランティア活動は、保護者や地域による「学校評価」において、地域・保護者の地元学校への信頼度の向上や感謝の声に表れている。

今後も退職校長・教員、特に若手の人材を学校支援ボランティアとして積極的に参加してもらおうと呼び掛けていく。